

## 効果的なアウトプット活動のやりくり ～Large Grammar の応用と場の工夫～

石田 順\*・竹川由紀子\*\*・金森玲子\*\*\*

鳥取大学附属中学校 英語科

E-mail: \*ishida\_j@tottori-u.ac.jp

\*\*takekawa\_yk@tottori-u.ac.jp

\*\*\*onishirk@tottori-u.ac.jp

**Jun ISHIDA, Yukiko TAKEKAWA, and Reiko KANAMORI (Tottori University Junior High School):  
A study of the effective output activities — An application of “Large Grammar” and ways of  
making occasion.**

**要旨** — 英語は人と人をつなぐコミュニケーションツールである。英語学習の醍醐味は自分が発信した英語が伝わり、相手の英語を理解できた喜びにもある。新型コロナウイルスの影響で、コミュニケーション活動が制限されるなか、教師は英語でつながる喜びをどのように生徒に伝えるか、またどのようなアウトプット活動が、生徒の英語による表現力の向上に効果があるのか、鳥取大学地域学部の足立和美が提唱する Large Grammar の手法を取り入れながら、活動の場の工夫について考えてきた。ここでは各学年で取り組んできた実践を紹介する。

**キーワード** — Large Grammar, チャンク, アウトプット活動

**Abstract** — English is one of the communication tools used by humans, and this is the very reason why English learners take pleasure in making themselves understood in English and understanding others' English. However, under the current situation in which new corona virus has spread globally, communicative activities using English in lessons have been limited in terms of amount of time and method of classes. This essay presents what Tottori University Junior High School has carried out, using methods of Large Grammar by ADACHI Kazumi of Tottori University, in English classes of each grade year, thinking about what kind of communication activities can be practiced, whether they can help develop students' ability in expressing themselves, and finally how teachers can give students chances to feel the joy of communication with others in English.

**Key words** — Large Grammar, chunks, output activities

### 1. はじめに

学習指導要領の改訂に伴い、小学校では今年度より、中学校では来年度から外国語(英語)教育を巡る環境も大きく変わることとなった。

外国語科の目標は「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成(文部科学省, 2017)することとしている。小学校での外国語活動では、「話す」「聞く」活動を中心に、コミュニケーションの素地となる資質・能力の育成をめざし、

高学年での外国語の学習においても、同様に「話す」「聞く」活動に重点を置きながら、取り組むこととなる。中学校では小学校での学びに加えて、「読むこと」「書くこと」の活動に触れながら、より統合的な技能習得をめざし、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することをめざさなければならない。これは、これまで以上に英語「を」どう学ぶかではなく、英語「で」何をやりとりするのか、に重きを置いた指導に心がけることと考えられる。

また、中学生になると小学校時ほど積極的な発話をしようとしなくなる。それは、学習の難易度が上がるだけでなく、自意識が育ち、正確さへのこだわりや不安が増大する認知的発達段階へ入るといふ学習者自身の変容にもある。そういったことも踏まえつつ、中学生のコミュニケーション能力を高める効果的なアプローチを模索する必要がある。

正確さへのこだわりや不安が顕著に見られるのは、ライティング活動である。生徒にとっては文字として残る自身の英語表現に対して、スピーキング以上に正確さを追求するあまり、相手を意識したコミュニケーションツールという認識が希薄になりがちでもある。

今年度は新型コロナウイルスの影響もあり、英語を使ったコミュニケーション活動(特に話す活動)に教師自身のやりくりを発揮しなければならない状況が未だに続いているが、生徒自身が英語でのアウトプット活動に積極的に関わろうとする場の設定とコミュニケーションツールとしての英語表現のブラッシュアップの両立をめざした試行錯誤を続けていく必要がある。

## 2. 生徒の実態

- 本校の生徒の英語学習における実態として、
- ・コミュニケーション活動に積極的である。
  - ・異文化や外国への興味・関心が強い。
  - ・語彙や表現をインプットすることが得意な生徒も苦手な生徒も見られる。
  - ・インプットしている語彙を即興でアウトプットすることが苦手である。

などの様子が挙げられる。学習に前向きに取り組む一方、既習の英語を用いたやり取りに苦勞

している生徒が多く、英語でのやり取りが生徒にとって簡単なことではないことがうかがえる。このような生徒の実態を踏まえたうえで、どのような活動が生徒の学びを深めていくことに効果的であるか、また、英語を手段として相手と繋がっていくためには、どのような活動が考えられるかを考え、日々の授業研究に取り組むこととした。

## 3. Large Grammar 活動

生徒が英語でコミュニケーションを図るためには、語い表現の習得などのインプットの蓄積が必要である。その蓄積があつて、適切なアウトプット、すなわち「言いたいことが言える」「書きたいことが書ける」というアウトプットへ繋がっていく。コミュニケーションの場面では、即興性が求められるため、瞬時にアウトプットできるためのトレーニング活動が不可欠である。トレーニングの一つとして、鳥取大学地域学部の足立和美特命教授が提唱している Large Grammar 活動を行っている。

### 3.1 学習の目的

英語を使うためのきっかけとなるチャンク(教科書の本文などを文節などで区切ったもの)を与えてインプット活動を行い、習得した英語をリサイクルするかのよう、書いたり話したりできるようなアウトプット活動へ繋げていく。

### 3.2 インプット活動(例)

- ① ワークシートを配布する。(図 3-2)
- ② ペアワークで一方が日本語、もう一方がそれをすぐに英文に直し、それが正しいかどうか日本語を言ったほうがチェックする。

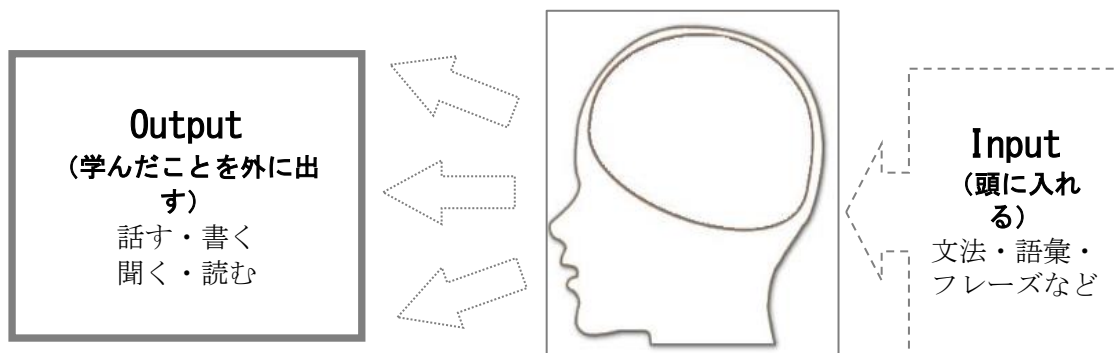


図 3-1 Large Grammar のイメージ

- ③ インプットするチャンクの数は一回につき 10 文から 15 文程度で行い、制限時間に何度かチェックを行う。

Lesson 4 The Story of Sadako	
チャンク集 日本語を見て、英語に直すことができるようにしましょう。	
1. ... Have you ever ...?	1. ～今までに...したことがありますか～?
2. ... Why don't you ...?	2. ～しませんか?～?
3. ... we should ...?	3. ～私たちは...すべきである～?
4. ... the importance of (peace) ...?	4. ～(平和)の大切さ～?
5. ... I've been interested in ...?	5. ～...にずっと興味があります～?
6. ... I wanted to ...?	6. ～...したいと思っていました～?
7. ... I'm glad to ...?	7. ～...して嬉しいです～?
8. ... in the future ...?	1. 将来～?
9. ... we can ...?	2. 私たちは...することができます～?
10. ... the experience of ...?	3. ...の経験～?
11. ... speak three languages...?	4. ～3か国語を話す～?

図 3-2 Large Grammar ワークシート

Combination 活動では、表現の広がりには限定されるが、チャンク同士を繋げるために後に続く品詞や文法を確認させることができる。アウトプットの初級的な活動である。この活動では、英語が苦手な生徒でも大まかな意味さえ理解すれば、どの英文とどの英文がマッチングするかのイメージがつかみやすいという利点がある。

アウトプット活動 (応用編)

Expansion 活動

意味の区切り(チャンク)に分けたものに、自分のアイデアを足して新しい英文をつくる活動

- ① チャンク表(図 3-2)のチャンクの前、または後ろに自分の知っている語を加えて、新しい英文を書く。
- ② 制限時間内にできるだけ多くの文を書く。(5分程度)
- ③ ペアで作った英文をシェアリングする。互いのアイデアを共有し次の活動につなげる。

3.3 アウトプット活動 (基本編)

Combination 活動

意味の区切り(チャンク)に分けたものを組み合わせる新しい文をつくる活動

- ① チャンク表(図1)のチャンクとチャンクを組み合わせて、新しい英文を作る。
- ② そのままでは組み合わせにくい表現は、意味が通る英文へ組みかえて英文を作ること可能。

例文

チャンク 3 + チャンク 10  
= We should speak three languages.

チャンク 8 + チャンク 4  
= We can (learn) the importance of (peace).

意味の区切り(チャンク)に分けたものを組み合わせて新しい文を作る。

1.	○○○○○
2.	●●●●●
3.	△△△△△
4.	▲▲▲▲▲
5.	□□□□□
6.	■ ■ ■ ■ ■

1 + 3 = \_\_\_\_\_  
5 + 2 = \_\_\_\_\_

意味の区切り(チャンク)に分けたものに自分のアイデアを足して新しい文を作る。

1 + X = \_\_\_\_\_  
X + 4 = \_\_\_\_\_  
1 + X + Y = \_\_\_\_\_

Expansion 活動では、チャンクに知っている表現を加えて単文を書くことからスタートする。時間を限定することで、生徒はできるだけたくさん書こうと意欲的に取り組む。チャンクの表現をイメージして、それに繋がる語いや表現を考えるとその情景を広げていく。

例文 下線部はチャンク

生徒 A

Have you ever played soccer?

I've been interested in it since I was a little.

Why don't you go to the park to play it?

I'm glad to play with you.

生徒 B

I wanted to be a doctor.

I wanted to see pandas.

I wanted to be a vet.

I wanted to be a nurse.

生徒 C

Have you ever been to Okinawa?

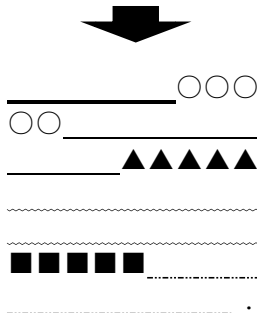
Why don't you go hopping with me?

I've been interested in basketball.

I wanted to watch TV with you.

生徒の書いた例文を紹介している。単文をたくさん書く活動であるが、慣れてくると生徒が一文からイメージをふくらませて関連性のある表現を書いている様子が分かる。生徒 A は、サッカーをテーマにしてチャンクを用いた繋がりのある英文を書いた。生徒 B のようにチャンクに繋がる語彙をたくさん書く生徒もいれば、生徒 C のように完全に独立した英文を書く生徒もいる。同じ指示を与え、ワークシートを用いて取り組んだ生徒のアウトプットが多岐にわたるのは、個々の想像力とやりくりに起因するところが大きい。

教師が選んだ3つのチャンクを含み、自分のアイデアを駆使して新たな物語を作る。



### アウトプット活動（発展編）

#### Advanced Expansion 活動

教師が選んだ3つのチャンクを含み、自分のアイデアを駆使して新たな物語(会話)を作る活動

- ① 指定されたチャンクを使い、ある程度意味の通ったストーリーになるように英文を作る。会話形式でも物語形式でも構わない。
- ② 制限時間は6分間。
- ③ 数名の生徒の英文をボードに書いて全体で共有する。

例文

下線部は指示されたチャンク

生徒 A

A: Have you ever been to Australia?

B: No, I haven't. I wanted to go there when I was a child.

A: Really? Me too. Why don't you go there this weekend?

B: Good idea! We will have a good time.

(37 語)

生徒 B

A: Have you ever been to New York?

B: No, I haven't, but I've been interested in New York since I was a little.

A: I'll visit there tomorrow. Why don't you go there?

B: Really? I'd love to. (35 語)

生徒 C

I've been interested in sushi. Sushi is Japanese original food. When I have a good thing, I usually go to sushi shop. I think sushi is the most delicious food in the world. Why don't you go to sushi shop with me? (42 語)

生徒は実によく考えて英文を作っている。実際にはあり得ないであろう出来事を英文の中で面白く表現できることもこの活動の楽しさである。

Why don't you～?などを用いるには物語形式よりも会話形式でストーリーを考える生徒が多くみられた。指示するチャンクによって、会話の方が話題を展開しやすいものもあれば、物語としてイメージをふくらませやすいものまでさまざまである。教師が指示するチャンクを使うことはもちろんだが、それに加えて自分の知っている語彙を引き出して、場面の中で使えるようにするために生徒たちは短い時間でさまざまなやりくりをして英文を書いている。スペルミスが見られたり、文法的に正しくない表現を書いたりすることがあるが、失敗をおそれずにどんどん発信させることがまずは大切なことである。Large Grammar 活動を行う中で、生徒たちは、授業で学んでいる英語がどんな場面で使われる表現なのかを考えて、「こんな場面で使えるな、いつか使ってみたい」という意識で学習に取り組むようになってきた。学んだ英語を生徒が使えるようにする活動の一つとして、Large Grammar 活動を紹介した。次に、各学年で取り組んだ授業実践の様子を紹介する。

#### 4. 1年生の取り組み

##### 4.1 学年の概要

小学校での外国語活動も定着し、中学校に入学する生徒の英語を学習する素地は年々高まっているように感じる。英語による指示や教科書の内容も、ある程度大まかに理解することができる。しかし附属中学校の生徒は、幅広い地域の小学校から入学する生徒であり、その分英語活動の体験や学びの積み重ねもさまざまであると考えられる。そこで、今年度は入学当初に英語に関するアンケートをとり、小学校では重点的に取り組むことがなかった「書くこと」に焦点化しながら授業に取り組むこととした。

##### 4.2 問題の所在

次の表は入学して最初の授業でとったアンケート結果である。会話中心の活動が主だった小学校での外国語であるはずが、アンケート結果では発表することに不安を感じている生徒が多くいることがわかった。(表 4-1)

表 4-1 英語の授業で一番楽しみにしていること

英語で人前で話すこと(発表)	3%
英語で人と会話すること(やりとり)	26%
人が話す英語を聞いたり、書かれた英語を読んで理解すること	66%
英語で書かれたものを読むこと	40%
英語で自分の考えなどを書くこと	31%

(複数回答可)

表 4-2 一番自分が不安に感じていること

英語で人前で話すこと(発表)	69%
英語で人と会話すること(やりとり)	23%
人が話す英語を聞いたり、書かれた英語を読んで理解すること	11%
英語で書かれたものを読むこと	6%
英語で自分の考えなどを書くこと	20%

(複数回答可)

これは入学間もない中でのアンケートということもあり、まだまだ人間関係が構築されていない中での不安感が出したものと考えられる。また、「書くこと」についての設問では、3割の生徒が楽しみにしており、2割程度の生徒のみが不安を感じていない結果となった。(表 4-2) このことも、小学校では会話中心の活動のため、英語を書くことの難しさや語彙力の必要などを理解していないためと思われる。中学校では話すこと以外にも「聞くこと」「読むこと」「書くこと」といった技能を習得するための活動の場を増やし、さまざまな経験をさせる中で英語に対する興味関心を高め、英語力の向上に努めることを工夫しなければならないと考えられる。

##### 4.3 書く活動との出会い

上述したように、生徒は話す活動や聞く活動には慣れているが、書く活動を体験している生徒は入学当初少なかった。教科書を通して少しずつ語彙力を身につける中で、いかにアウトプット活動を取り入れていくか、英語を書くこととどのように出会わせるかを考えていく必要があった。

本校は英国のニューステッドウッドスクールと姉妹校関係を結んでいる。2年に一度、英国から来日し、ホームステイなどを体験しながら、本

校の教育活動の体験を通して、交流を深めている。また例年ペンパルを募り、希望する生徒には手紙でのやりとりも勧めている。ニューステッドウッドスクールの生徒は日本語の学習の一環として日本語で手紙を書き、本校生徒は英語で手紙を書く活動を通年で取り組んでいる。

そのような環境を利用し、書く相手を意識しながら書く活動を取り入れるようにしてきた。英文で手紙を書く活動が英語を書くことに対して抵抗が少なくなる事が期待されると同時に、生徒の英語を書いたり話したりしたいという、英語学習への積極性に繋がり、総合的学習動機に影響を与える(伊藤, 2015)と考えられるからである。

夏休み前にはそれまでの学習の成果として、ニューステッドウッドスクールの生徒に向けて、自己紹介文を書く取り組みを行った。表現できるフレーズや語彙は非常に限られている中で、生徒は自ら知っている英文を駆使しながら、自分を紹介する英文を懸命に書いていった。取り組みの中で意識させたのは、文と文のつなぎ目である。できる限り「by the way」や「so」といった言葉を用いて、文のまとまりを意識させていった。(図 4-1)

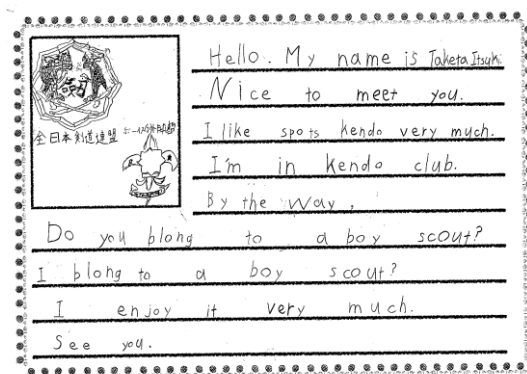


図 4-1 生徒の自己紹介文

生徒の自己紹介文を見てみると、まだまだ未熟な面が多く見られるが、既習の表現を積極的に用いながら、自分を知ってもらおうとする姿勢は感じられる。(図 4-2)

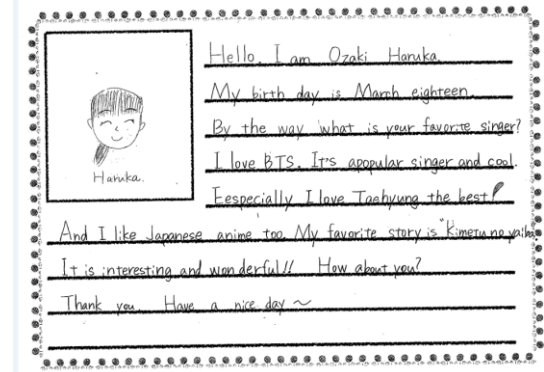


図 4-2 生徒の自己紹介文

#### 4.4 セレブレター

11 月になり、既習の文法事項や語彙も多く学習してきた。12 月のクリスマスシーズンを迎え、セレブレターというアウトプット活動に取り組むこととした。

セレブレターとは、自分が好きな海外のアーティストやスポーツ選手に実際に手紙を送るという活動である。

事前に生徒はインターネットなどの情報から送り先を調べ、その後学校でファンレターを書き、返信用の封筒を入れ、実際に自分の足で郵便局に持って行き、送る。学校での評価はファンレターづくりだけなので、実際に海外に送るかどうかは生徒自身に任せている。

実際に送る場合、生徒は自身が書き綴った手紙と返信用封筒を同封する。返信用封筒には生徒の住所を記しておき、後日返事が届いたときには生徒住所へ届くことになる。海外からの返信には時に夏頃となることもあり、非常に時間のかかることである。忘れた頃に自分が好きな海外のセレブから手紙が届くのはとても感動的であり、自分の英語が相手に届いたときの喜びは筆舌に尽くしがたいことである。そのような体験を繰り返すことで、自分の英語で表現することへの抵抗も少なくなり、意欲も高まるものである。

この活動の説明を聞いても、生徒にはなかなか実感がわかかなかったようだが、過去の先輩の手紙や実際にセレブからサイン付きのプロマイドや返事が送られてきたことを伝えると、途端に生徒の目の色も変わり、この活動への意欲もわいてきたようだ。



英文については、クリスマスでよく用いられる定型文や表現を紹介しながら、少しずつ自分の書きたいことに合わせて英文をやりくりしながら表現しようとする姿が見られた。(図 4-3)

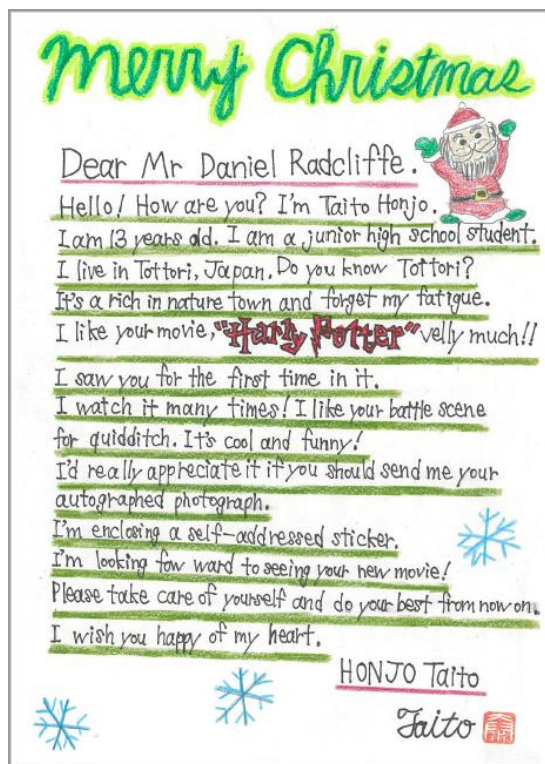


図 4-3 生徒の作ったセレブレター

生徒は辞書やインターネットを活用して、クリスマスにふさわしいフレーズや表現を借用し、そこから自分が伝えたい内容へ手を加えながら、手紙を書いていた。生徒にとって英文を書くことはかなり難易度の高い活動ではあるが、教科書やさまざまな媒体に書かれている表現をアレンジしながら、自分なりの表現に昇華していくことには、抵抗を示さず取り組むことができているので、今後のライティング活動にも生かすことができそうである。

#### 4.5 1年生の実践の考察

ニューステッドウッドスクールへの自己紹介文とセレブレターの取り組みを通して、書くことの意欲や表現力を高める工夫を図ってみた。12月に再びとったアンケートでは次のような結果が見られた。



図 4-4 生徒の作ったセレブレター

表 4-3 英語の授業で一番楽しかったこと

英語で人前で話すこと(発表)	9%
英語で人と会話すること(やりとり)	52%
人が話す英語を聞いたり、書かれた英語を読んで理解すること	43%
英語で書かれたものを読むこと	49%
英語で自分の考えなどを書くこと	16%

(複数回答可)

表 4-4 英語の授業で不安に感じていること

英語で人前で話すこと(発表)	59%
英語で人と会話すること(やりとり)	23%
人が話す英語を聞いたり、書かれた英語を読んで理解すること	22%
英語で書かれたものを読むこと	10%
英語で自分の考えなどを書くこと	52%

(複数回答可)

春に比べて半数の生徒が英語で人と会話すること(やりとり)を楽しかったと答えている。(表 4-3) 中学校生活にも慣れ、英語を

通して他の生徒とコミュニケーションを深めていくことに喜びを感じたり、普段なかなかたずねたり話したりしない内容でも、英語を用いると気楽にたずねられることもあるので、評価が高くなったように思われる。

また逆に書くことへの不安を感じる生徒が多くなっていることがわかる。(表 4-4) 会話でのやりとりとは異なり、英語を書いて何かを伝える時、文字を正しく書かなければならなかったり、文法的な誤りを防がなければならなかったりといった、話すこと以上により「正確性」が求められることから、生徒には難しく感じられたようだ。

表 4-5 これからどのような力を身につけたいか

身につけたい力	4月	12月
話す力	6%	66%
聞く力	34%	55%
読む力	34%	34%
書く力	54%	74%

(複数回答可)

最後に、生徒が今後どのような力を身につけたいかたずねた設問では、「話す力」と「書く力」と答えた割合が春に比べて非常に高くなった。(表 4-5) 今年度は新型コロナウイルスの影響で、これまでのように英語で他の生徒とコミュニケーションを図る活動が自由にできる状況ではなかった。感染防止の視点を持ちながら、徐々に英語を使った人と人とのつながりを大切にする活動を取り入れている。この結果は生徒からの「もっと英語で話したい」「もっと英語を使って外国の生徒とやりとりしたい」というメッセージだと受け取っている。さまざまな制約を受けながらも英語を使う場面の設定にやりくりを加えながら、今後もさまざまな活動を広げていきたい。

## 5. 2年生の取り組み

### 5.1 学年の概要

昨年度末(令和2年3月から約1ヶ月間の)臨時休業期間を経て、学校再開となった4月以降の授業では、感染症対策をした上で考えられる活動や授業形態を工夫しながら実践に努めてきた。音読や発表などの制限をする中であっても「書くこと」は継続して実践することができる活動であるため、今年度も昨年度に引き続き、「生徒の英作文」指導に重点化して行うこととした。学習の成果物である英作文を観察、分析し、やりくり授業を通して生徒が書く英文にどのような変化が見られたか、個々の思考や学びが深まったのかを考察しながら授業づくりを行った。

### 5.2 2年生のやりくり授業

本校では、生徒が学習を通して「やりくり」する場面を与え、自身で思考を広げ、他者との関わりを通して新しい気づきを生むような授業を行い「やりくり授業」と称して各教科で実践している。2年生の英語科でも生徒がやりくりできる場面を与え、思考が広がるような展開を意図した。英語科におけるやりくり授業のポイントとそこでめざしたい生徒の姿を以下のようにした。

#### やりくり授業のポイント

(ア)主活動は非定型問題とする

(イ)生徒が自身の経験や既存の知識を使って問題解決する

(ウ)他者との関わりを通して自分の思考や考えを広げる場面がある

#### めざしたい生徒の姿「学びに向かう力」

(ア)意欲・関心

英語を使うことを楽しみ、間違いを恐れずに表現する。さまざまな言語や文化に興味を持ち、自ら知ろうとする意欲を持つ。

(イ)表現力(英語の運用能力)

既存の知識や語いと伝えたい内容を結び



つけて自分でやりくりしながら、相手へのメッセージを発信しようとする。

#### (ウ)仲間づくり

ペアやグループ活動のよさを理解し、協同的に探究する。他者とともに多様な知識を関連づけて新たな気づきを発見する。

### 5.3 Large Grammar 活動

英作文指導の中で生徒がやりくりする場面を作るために、足立和美鳥取大学名誉教授が提唱される Large Grammar 活動(以下 LG 活動)の手法を元にして、既習のチャンクを使った即興のやりとりに取り組んだ。

#### 5.3.1 LG 活動—Expansion 活動

[活動例①(Expansion 活動)]

4 技能:「話すこと」

設定時間 1分30秒

目標:チャンクに自分の知っている語いや表現を加えて、即興で英文を言う。



図 5-1 ペア活動の様子

Let's Talk 1 & Lesson 3		チェック欄
1.	If it's clear...	もし晴れたら...
2.	If it rains...	もし雨が降ったら...
3.	You will learn about ...	...について学べるでしょう。
4.	I'm going to ...	(私は) ...するつもりです。
5.	Are you going to ...?	(あなたは) ...するつもりですか?
6.	the day after tomorrow	あさって
7.	this weekend	今週末
8.	next month	来月
9.	in the future	将来
10.	I'm interested in ...	...に興味があります

図 5-2 チャンク表例

やりくり授業では, LG 活動の 3 種類の活動のうち, Expansion 活動と Advanced Expansion 活動の 2 種類を行った。

[活動例②(Expansion 活動)]

4 技能:「書くこと」

設定時間 5分

目標:チャンクに自分の知っている語いや表現を加えて、即興で英文を書く。

Expansion 活動 (例) 生徒 A の英作文

目標 表のチャンクリストに、知っている語(や表現)を組み合わせて英文を作る

5分間で 目標は 4 文 ← 自分で決めよう

- ・チャンク表の中の英語の一つに、自分のアイデアを足して新しい英文を作ろう
- ・アイデアを足すのは、英文の前でも後ろでもOK
- ・辞書を引いたり、たずねたりせず、自分の知っている英語で書くことに挑戦しましょう

6月

- You will learn about Kendo this weekend.
- I'm interested in Wrestling.
- I'm interested in Judo.
- You will learn about music.
- You will learn about soccer.
- You will learn about Fudoh.
- I'm going to play the piano.
- I'm going to study for the exam.
- Are you going to practice basketball?
- I'm going to play baseball next month.
- I'm interested in Fudoh.
- I'm going to become good Wrestling player in the future.
- Are you going to watch TV the day after tomorrow?

☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆

基本レベル 3文 発展レベル 5文 達人レベル 10文 ネイティブレベル 20文

13 sentences

図 5-3 6月に書いた英作文 (13文)

目標 表のチャンクリストに、知っている語(や表現)を組み合わせて英文を作る

5分間で 目標は 10 文 ← 自分で決めよう

- ・チャンク表の中の英語の一つに、自分のアイデアを足して新しい英文を作ろう
- ・アイデアを足すのは、英文の前でも後ろでもOK
- ・辞書を引いたり、たずねたりせず、自分の知っている英語で書くことに挑戦しましょう

6月

There are umbrelr.

- We must go to the school.
- We musn't run in the classroom.
- I think that she is very cute.
- I know that your is slving.
- I'm interested in sports.
- pencil on the desk.
- textbooks in the desk.
- there is a bread.
- there are pencil.
- We must wash your hands.
- We musn't break doll.
- there is a text book.

☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆

基本レベル 3文 発展レベル 5文 達人レベル 10文 ネイティブレベル 20文

17 sentences

図 5-4 7月に書いた英作文 (17文)

Expansion 活動 (例) 生徒 B の英作文

目標 表のチャンクリストに、知っている語(や表現)を組み合わせて英文を作る

5分間で 目標は 5 文 ← 自分で決めよう

- ・チャンク表の中の英語の一つに、自分のアイデアを足して新しい英文を作ろう
- ・アイデアを足すのは、英文の前でも後ろでもOK
- ・辞書を引いたり、たずねたりせず、自分の知っている英語で書くことに挑戦しましょう

6月

- I'm interested in Unisef.
- I'm going to study science.
- If it's clear I ride a bike.
- I will play the piano the day after tomorrow.
- If it's rains I bring my umberra.
- 
- 
- 
- 
- 
- 

☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆

基本レベル 3文 発展レベル 5文 達人レベル 10文 ネイティブレベル 20文

5 sentences

図 5-5 6月に書いた英作文 (5文)

目標 表のチャンクリストに、知っている語(や表現)を組み合わせて英文を作る

5分間で 目標は 7 文 ← 自分で決めよう

- ・チャンク表の中の英語の一つに、自分のアイデアを足して新しい英文を作ろう
- ・アイデアを足すのは、英文の前でも後ろでもOK
- ・辞書を引いたり、たずねたりせず、自分の知っている英語で書くことに挑戦しましょう

7月

- We must do my homework.
- There is a eraser on the desk.
- I'm interested in the cars.
- I think that tennis is fun.
- There is a book in the desk.
- There are textbooks in the desk.
- We musn't don't our homework.
- There is a pencil on the desk.
- I think that we must do my homework.
- I'm interested in the internet.

☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆ ☆☆☆☆☆

基本レベル 3文 発展レベル 5文 達人レベル 10文 ネイティブレベル 20文

10 sentences

図 5-6 7月に書いた英作文 (10文)

[考察]

Expansion 活動 (書くこと) では、学習した表現ごとのチャンクリスト (図 5-2) をインプットし、それを使った即興のアウトプットを継続すると生徒の書く英文数に変容が見られた。

Expansion 活動を6月、7月と継続して行うことで、生徒が書く英文の数には変化が見られた。

表 5-1 5分間で書いた英文の数

英文の数	6月	7月
1～5文	4 (6%)	3 (4%)
6～10文	<b>37 (56%)</b>	23 (34%)
11文以上	25 (37%)	<b>30 (45%)</b>

表 5-2 英文の数の増減

英文の数の増減 6-7月	クラスD	クラスA	合計	割合
増えた	18	23	41	<b>62%</b>
減った	8	5	13	19%
変わらない	7	5	12	18%

6月には、6文～10文程度の英作文を書く生徒の割合が最も多かったが、1ヶ月後の活動では、約半数以上の生徒が5分間で10文を書くことができた。この活動はチャンクを元にしてそれに自分の知っている語彙を加えることで容易に英文づくりができる。ゼロから英文を生み出す活動に比べて生徒の負担が少ない。間違いを気にすることなく、短時間でたくさん書く活動は、英語の得意、苦手に関係なく取り組める活動となっている。

### 5.3.2 LG活動—Advanced Expansion 活動

#### 活動例

4技能:「書くこと」

設定時間 6分

目標:指定された3つのチャンクを使った英作文。自分の知っている表現や語彙を加えてつながりのある英文を書く。

LG活動の発展活動として、Advanced Expansion活動を行った。この活動では、「3つのチャンクを使い英文を作る」問題を与え、個々が多様な表現で英文を書けるようにした。この活動では、与えられた3つのチャンクは同じでも生徒が書く英文は様々である。個人で書いた英文を他者と共有することで、

相手からのフィードバックや自分にはない気づきを得ることができていた。さらに表現に深まりが生まれ、共有を通して表現の幅が広がった生徒が増えてきたと考えられる。(図5-7)

この活動では、短い時間でまとまりのある英文を書かせるために次のことを留意した。

- 指定されたチャンクがそれぞれどんな場面で用いられるのか(言語の使用場面)をイメージさせること。
- 会話の登場人物や場面を決めて書かせること。



図 5-7 他者と共に考える(協同学習・ペア)



図 5-8 他者と共に考える(協同学習・班)

この活動では、チャンクを3つ指定し、それらを用いて関連性のある英文(会話文)を作る。インプットした語彙を実際に使えるかどうか、辞典などを使用せず、チャンクに既知の知識を組み合わせることで英作する。生徒自身は自分が書いた英文を通して、使える英文に



気づくことができる。

さらに班で読み合うことで、さまざまな語彙や場面設定の工夫など、友達の工夫に刺激を受けて書きたい表現に深まりが生まれる。やりくり授業では、以下のことを参考に授業づくりを行ってきた。

- 非定型の問題に対して個人で取り組み
- 個人が書いた英文を他者と共有する，協同的な学びを位置づける

これは、協同的探究学習のプロセスを参考にしている。以下に詳しく説明する。

### 5.4 協同的探究学習

協同的探究学習(図5-9)は、「個人探究(導入問題)」から「協同探究(情報の共有・思考の広がり)」を経て、最終的に「個人探究(展開問題)」ができるような非定型の問題を授業で設定する。(藤村, 2018)やりくり授業では、「指定された3つのチャンクを使った英作文」を非定型の問題として、取り寄せた。

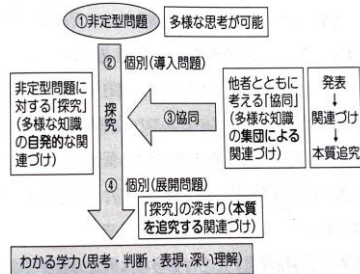


図2-1 「協同的探究学習」——学習方法としての4つの特質

図5-9 協同的探究学習(藤村ほか2018より)

授業のプロセス(図5-10)は、導入場面では個人で思考し、ある程度英文が書けたところで他者との協同学習を通して深化させていくことで思考がより深まりを増す。最終的には、さまざまなヒントを得ながら、再び個人で考え英文で個人の思いを発信する。

表5-3 英作文の授業におけるプロセス

学習形態	学習活動
① 個人探究	自己紹介の英文を書く。
② 協同探究 ペア・全体	ペアで英文を読み、理由の表し方の多様性を知る。
協同探究 班・全体	班で英文を読み、語彙や表現の多様性を知る。よりよい英文にするためのアドバイスをしあう。
③ 個人探究	他者の英文から、英文の構成を考えながら意見文を書く。

協同的探究学習の手法を用いて授業を行った結果、生徒の思考の中で以下のような姿が見られた。

- ① 自分の知っている表現でやりくり(個人)
- ② 他者の英文を読んで、学びを深める(協同学習)
- ③ 最終的に自分で英文を広げる(個人)

段階を経て、生徒が経験や既存の知識を元に、表現可能な英語の表現とそれらをつながながら英作文をした。思考の過程は、まさに生徒のやりくりの場面そのものである。

(図5-9, 表5-3)

### 5.5 成果と課題

今年度は、単元の終末に継続してやりくり授業を行った。6月7月に行ったやりくり授業では、3つのチャンクを使った英作文という非定型問題を提示した。12月には、「自分の好きな国」についての意見文というテーマで既習の表現をやりくりしながら英作文づくりに取り組ませた。

**My Favorite Country**

Hello, I'm going to talk about "My favorite Country." I like America the best. There are 3 reasons.

First, America is famous for the Statue of Liberty. It's very big.

Second, I like Sponge Bob. It's funny and cute character.

Third, America is lively Halloween and Christmas event. I like American event. I hope that I will go to America.

図 5-10 生徒 A が書いた英文 (12月)

**My Favorite Country**

Hello, I'm going to talk about "My Favorite Country." I like Germany the best. There are three reasons.

First, There is an unlimited speed highway. I want to see it. Second, There is a Berlin wall. I like histories. Third, Germany is famous for cars. I like cars very much. I hope that I will visit Germany in the future.

図 5-11 生徒 B が書いた英文 (12月)

6月・7月に行ったLG活動で生徒が書いた英文の語数と比較すると、12月の意見文で同じ生徒が書いた英文の語数(図5-10、図5-11)

は増えている。これは、間違いを恐れず英文を書いているのだという安心感が英文量を増加させていると考えられる。また、回数を重ねる中で、書きたい表現を自分で調べたり、他者の表現をまねたりすることに起因して、語彙や表現が増えたのではないかと考えられる。

生徒がアウトプットできる英文の数(量)は学習に比例して多くなる。一方で、難易度の高い表現もあるため、一概に英文の量だけでは生徒の成長ととらえられない部分もある。定期的に生徒が自分で書いた英文の量やその表現を見返すことで、年度当初の目標を見返したり、当時と今の英文昨年度の英作を読み返したりすることで、生徒自身が以前に比べて「書ける量が増えた」ことを実感させる時間を持った。生徒が書いた英文は、その成長を実感できる資料となり、今後への意欲を生む大切な教材となった。生徒が、自分の書いた記録を見返すことで定期的な振り返りを行ってきた。教師は、生徒の英文を定期的に比較することで、やりくり授業を通して生徒が表現の幅を広げた様子を感じることができる。このことは、生徒自身が振り返り今後の目標を立てるのに有効であった。今後も継続して行いたい。

## 5.6 2年生の実践の考察

英語を学ぶことを通して自国の良さを知り、それを発信する英語力を身につけることも学ぶ目的の一つである。他国の状況をさまざまなメディアを通じて知ることができる時代である。来日する外国人や海外への渡航が少なくなっている日常の中にあっても、日本と世界との関わりには目を向けていけるような授業をめざしたい。

やりくり授業の中で行ったLG活動では、「即興で話すこと」やじっくり考えをまとめて「発表すること」が「やり取り」の両輪となる。インプットとアウトプットのバランスを考えながら、統合的に使える英語力の育成をしていきたい。



## 6. 3年生の取り組み

### 6.1 学年の概要

中学校では来年度、教育課程が大きく変わる。その移行期にある本年度は、生徒たちにどのような力をつけさせるのかを考えた1年であった。様々な進路を目指す生徒たちに対して、何を重視して教えるべきかについてのアイデアを数え上げればきりがないが、生徒に英語の基礎的な力をつけ、それをどのようにアウトプットさせていくのかという観点から、2022年度からの高等学校での新学習指導要領全面実施も視野に入れつつ、書くことに限らず「やりくりをしていく」ことについて授業を実践した。その中でも今年度は特に、人前で英語を話すことができるようになることを重視した。ここでは、よりよく人に伝えるために、生徒がどのようなやりくりを試みたかを説明する。

### 6.2 Large Grammar でのアウトプット

外国語のアウトプット(話す、書く)の熟達には、インプットの質の量は欠かせない。そこで、Large Grammar の手法の一部を使い、特に習得させたい熟語(連語、語彙)を含む文章を書かせる練習をした。

too 形容詞 to 動詞の原形
This curry is too spicy to eat.
instead of 名詞(動名詞)～
I ate bread instead of rice.
I played baseball instead of playing tennis.

図 6-1 定型を使い作文をする活動例  
(Large Grammar 応用)

この方法で習得した連語を、生徒の発表活動では、使う姿が見られた。発表活動については後程述べる。

### 6.3 「聞くこと」の試み

来年度より、教師は授業を英語で行うことが基

本となる。中学校学習指導要領(H29告示)外国語編では、「聞くこと」における第3学年の目標は、

#### (1) 聞くこと

はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ったり話の概要をとらえたりすることができるとともに、社会的な話題について、話の要点をとらえることができる、となっている。

一方、高等学校学習指導要領(H30告示)外国語編の英語コミュニケーション I では、

ア 日常的な話題について、話される速さや使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話し手の意図を把握することができるようにする。

イ 社会的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、多くの支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、概要や要点を目的に応じてとらえることができるようにする。

となっている。また、英語コミュニケーション II では、

ア 日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を把握することができるようにする。

イ 社会的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、概要や要点、詳細を目的に応じてとらえることができるようにする。

となり、英語コミュニケーション III では、

ア 日常的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を把握することができるようにする。

イ 社会的な話題について、話される速さや、使用される語句や文、情報量などにおいて、一定の支援を活用すれば、必要な情

報を聞き取り、概要や要点、**詳細**を目的に応じてとらえることができるようにする。となっており、英語を「聞くこと」において、4年間で段階的に変化している。

中学校3年生では大まかにわかればいいものが、高校2、3年となるにつれて、目的に応じて聞き取ったり、細部にまでわたって情報を捉えたりすることができるようになることが目標として設定されている。

そこで、中学校卒業後も学習が続くことを視野に入れ、家庭での学習としてリスニングやディクテーションのトレーニングを取り入れ、学校では新出文法との出会いの場面や学習する各課(Lesson)の背景にある新情報について英語での導入を試みた。英語を聞かせながら、とところどころで質問をしたり、話し合いをさせたりして、大まかに内容を捉えさせるようにした。次はその実践例である。

### 6.3.1 「聞くこと」の実践例

本校で使っている教科書 New Crown English Course 3 の “Let’s Read 2 We Can Change Our World” では、聞くことの活動として、授業の冒頭でこのように導入し、授業を進めた。


Today, you are going to learn about a boy called William Kamkwamba. This is a picture of him. He was 14 years old like you at that time. First of all, I’d like to check where he is from. Have you ever heard of the country called Malawi? (現在完了・過去分詞) It’s a small country in Africa (図 6-3) . I’d like to give you a hint. Malawi is as large as Kyushu, Shikoku, Chugoku and Kinki District (図 6-4) . Talk with your partner to find where Malawi is. (中略) Now, can you guess what languages are spoken in Malawi? Choose one from a. to c., then choose one from d. to e.

この英文を導入するにあたり、生徒は図 6-1 にあるワークシートを手元に持ち学習を進め、教師は状況に応じて、図 6-3、6-4 の地図を見せながら導入したり、説明を補ったりした。




LE 2 We Can Change Our World

Class: No: Name:

1. Where is Malawi? Color the country.



2. Which one is the national flag of Malawi?

a.  b.  c. 

3. What's the capital city of Malawi? If you know, write in Kanakans.

4. Choose the languages spoken in Malawi.

Choose one from a. to c.

a. French b. English c. Spanish

Choose one from d. to g.

d. Arabic f. Kiswahili g. **Chibwena**

図 6-2 生徒用ワークシート



図 6-3 アフリカの地図



図 6-4 日本とマラウィの比較地図

英語の授業とはいえ、初めて知る情報についてすべて英語で話されると、英語に苦手意識がある生徒の中には、拒否感を示す者もいる。そのような場合には、visual aid(視覚的資料)(図6-2, 6-3, 6-4)を準備したり、ペアでの話し合いを入れたりすることで、聞くことに意識を向けさせるようにした。このような場面で話す英語には、前述の導入に英語のように、3年生で学習した新出文法を含むようにし、過去にインプットした英語を引き出しの中から出しつつ、英語を聞かせることを意識した。なお、教科書には載っていない、アフリカが過去にどこの国に植民地にされていたか、またそれがその国々の公用語、さらには識字率にも影響を及ぼしている話などは、非常に興味を持って聞いている生徒が多かった。生徒にとって身近ではない話でも、支援をしながら伝えることで、生徒がおおまかに内容を捉えることができることを実感した。

#### 6.4 「話すこと(やり取り)」の試み

「聞くこと」以上に「話すこと」は生徒にとってはさらに高いハードルとなる。テーマを与え、即興で話させ、話した内容をペアがメモし、最終的にはメモした情報を英語で文章にする Interview and Report の活動も取り入れたが、やはり日本語を使ってしまう生徒が多く、即興では英語のみで話して伝えるということがまだまだ困難なようである。今までにインプットした英語を自分の言葉としてアウトプットするのは容易なことではないが、新学習指導要領では「即興での発話」という言葉がさらに強調されており、思ったことを英語で処理し発話する訓練をしていく必要がある。そのために、Large Grammar(Advanced)活動のつくった物語に関して、即興で質問し、答えるという活動は、即興で話す練習としては効果が期待される。

- 新学習指導要領では、話すことについて、
- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝えあうことができるようにする。
- イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持などを整理し、簡単な語句や文を用い

て伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。

- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。

と述べられている。これを踏まえながら、生徒の英語による発表活動につなげるため、上記指導要領の中にあるウの項目を意識した取り組みを行った。

#### 6.4.1 「話すこと(やり取り)」の実践例

本校使用の教科書 New Crown English Course 3 の Lesson 6 I Have a Dream において、答えが一つではないものについて考え、図 6-5 のワークシートを用いて、意見を述べ合う活動を行った。

The image shows a student worksheet titled "I HAVE A DREAM ②" from the textbook "Lesson 6 USE Read, 75, 76" Paragraph 4, 5, 6. It includes a header with "CLASS:", "NO:", and "NAME:" fields. Below that is an instruction: "★Read the textbook and answer the questions in Japanese. After that, try to answer in English. ★". The worksheet contains two paragraphs of text with questions. Paragraph 4 asks: "Question: Why did Dr King choose Washington D.C. as the place he would make a great speech?". Paragraph 5 asks: "Is it right for you to be judged by the content of your character? And why?".

図 6-5 生徒用ワークシート

教科書には答えがなく、自分自身の考えを述べなければならぬ質問であったため、英語で伝えあうことは日本語で以上に難しかったのだが、この後述べる発表活動に向けての取り組みとしては、一定の効果を得られるものとなった。これに関しては、6.6の後半で述べる。

#### 6.5 「話すこと(発表)」の試み

新学習指導要領では、「話すこと」の活動に新たに「発表」の項目が以下の通り加わり、

- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。
- イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

「話すこと(やり取り)」と「話すこと(発表)」とを比較してみると、英語で相手とのやり取りをする場合と、聴衆を前に一定時間英語を話し続ける場合との違いがわかる。ただ、生徒の中には人前で単に音声を出す形で英語を使うことにも抵抗を感じている生徒がいるため、英語を発言させることへの抵抗感をなくすために、段階を経ながら人前で英語を話させることに慣れるための取り組みを行った。

これが新学習指導要領にある発表活動といえるかどうかは不明であるが、人前で英語を話すことを高校入学後できるようになることを目指し、人前で英語を話す際のやりくりの技術の向上に取り組んだ。

人前で英語を話す(音読を含む)取り組みは以下のような段階で1年をかけて行った。主に教科書(New Crown English Course 3)の Let's Talk 学習後のスキット発表や Lesson が終わるごとにその本文の内容を理解したうえでの音読発表を経たうえで、最終段階では自身で考えたものの発表に向かわせた。

- ① Let's Talk 1(道案内をしよう)学習後の発表
  - ② Let's Talk 2(どうかしましたか)学習後の発表
- 上記2つについては、ペアでの発表とし、教科書そのまま発表や文の内容を少し変えたり、内容を大きく変えたり、文の量を増やしたり等、生徒が選べるハードルをいくつか設定し、取り組ませた。初めての発表ではあったが、各クラスに3~5ペアほど完全オリジナルで発表をする生徒があった。しかしながら、

多くの生徒は「英語を人前で発話する」の段階にあった。

- ③ Lesson 5 Brazil の Use Read(Ken のスピーチ)を学習後、班のメンバーで Ken になりきり、暗記して自分の言葉として音読発表する。内容を捉える学習では、本文を読むのではなく、本文を聞き、概要を捉える活動とした。次の図 6-1 は、New Crown English Course 3 の Lesson 5 Brazil において、内容を深めるために、答えが教科書にあるものを考えさせるワークシートの例である。

**Lesson 5 Places to Go, Things to Do P.60, 61**

Class: No: Name:

Pre Reading(Listening) 音声聞いて、3つの質問に答えなさい。

P.60

Q1 ケンが訪れたい国と、健がそこでやりたいことはいくつありますか。

国 やりたいことの数

Q2 過去数年間に Q1 の国が主催した主要なスポーツ大会は何でしょうか。

Q3 Q2 の大会において、私たちはどんなことを知ることができましたか。

P.61

Q4 リオデジャネイロでのカーニバルはどんなものでしょうか。わかったことを書きましよう。

Q5-1 カーニバルのハイライトは何ですか。

-2 ハイライトのイベントに参加するチーム数は?

-3 それぞれのチームが作るものは?

やまおくり

E.60 Brazil

図 6-6 生徒用ワークシート

- ④ Lesson 6 学習後に、Use Read(キング牧師のやってきた運動とその後について)を班のメンバーで暗記して自分の言葉として音読発表する。その時代のアメリカの現状を学習し、前述 6.3 に記した「答えが一つではないものについて考え、意見を述べ合う活動」を経て、キング牧師の実際のスピーチを見ることで、気持ちを高め、よりよく仲間に伝えるためのやりくりを行い、発表する。ワークシートは図 6-5 にあるものを利用して行った。
- ⑤ Let's Talk 4 を学習後、学習した文法(関係代名詞及び Would you like ~ ? か How about ~? を使用することで、1人1分程度

の発表を行った。生徒は班を母体として発表人数を自由に決めることができ、1人～5人という人数の幅での発表を行ったため、発表の長さも1分～5分とさまざまであった。やりくりとしては、学習した英語を使うことに加え、伝える際にいかに効果的に伝えるかなど、工夫できる点が多くある。

以上のように、①～⑤までの段階を経ながら、徐々に生徒たちがやりくりをする部分を増やしていく発表活動となった。⑤の段階では、過去4回の発表の経験を活かし、生徒も多くのやりくりをすることができた。発表の内容としては、1人で夢についてのスピーチを行ったり、日本や海外の昔話、映画などもともとある話を劇風にして発表したり、自分たちでオリジナルの場面を設定して会話を繰り広げたりしていた。

中でも興味深かったのは、時代に合わせてトランプ氏とバイデン氏のディベートの様子を別の内容にして再現したり、日本の総選挙の場面を再現したり、生徒自身が世の中で気になっていることを英語で伝えようとしたことであった。発表を作る際には、周りの友達が嫌な思いをしないもの、学校で発表するにふさわしいものという条件を付けるのであるが、それをクリアしたうえで、「聞いている友達がわかりやすいように学習した英語を利用して物語を作る」ことを意識している生徒が多かった。

## 6.6 発表活動の成果

すべての発表活動後に行ったアンケートの結果から、発表活動を継続的に行うことで、生徒が人前で英語を話すことに対する抵抗感を減らすことが少なからずできた。

アンケートでは、発表活動に取り組む以前の1、2年生の頃、人前で英語を話すことに自信はあったかについて以下のとおりの選択肢で生徒に尋ねた。

1. 自信がなかった。
2. どちらかと言えば自信がなかった。
3. どちらともいえない。
4. どちらかと言えば自信があった。
5. 自信があった。

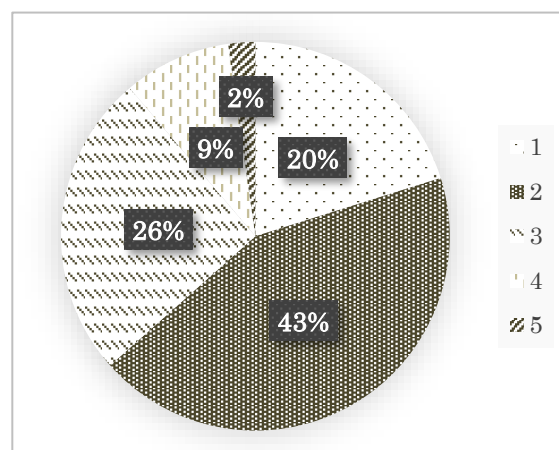


図 6-7 発表活動に取り組む以前の  
人前で話すことについての自信

図 6-7 を見ての通り、発表活動に自信があるという生徒はわずか 11 パーセント(項目 4, 5 の合計)で、自信がないという生徒は実に 60 パーセント(項目 1, 2 の合計)を超えていた。

その生徒たちが、年間を通して行った5つの発表活動を通じ、人前で英語を話すことに自信がついたかについては、以下のアンケート項目での結果を通してである。

1. 自信がなくなった。
2. どちらかと言えば自信がなくなった。
3. 以前と変わらない。
4. どちらかと言えば自信がついた。
5. 自信がついた。

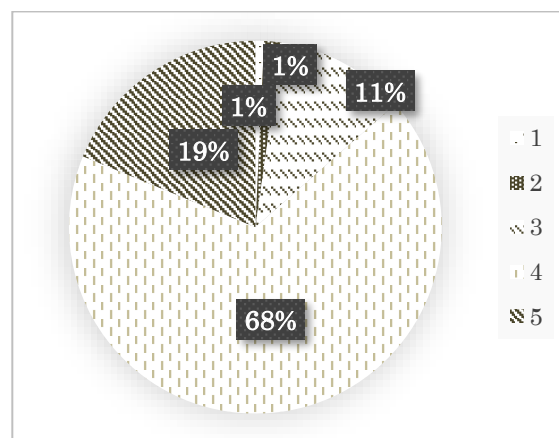


図 6-8 発表活動を終えての自信

自信がなくなったと回答した生徒が 2 パーセント程度(項目 1, 2 の合計)あったものの、自信がついたと回答した生徒が 87 パーセント(項目



4, 5 の合計)にも及んだ。

また発表活動を行う際のやりくりについては、発表する(人前で話す)際に、よりよく仲間に伝えるために工夫をしたか否かについて、以下の通り質問した。

1. 工夫をしなかった。
2. どちらかと言えば工夫をしなかった。
3. どちらともいえない。
4. どちらかと言えば工夫をした。
5. 工夫をした。

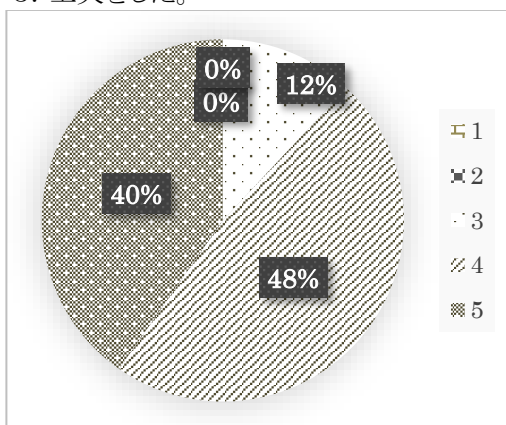


図 6-9 仲間に伝えるために工夫したか否か

その結果は、図 6-9 を見てもわかる通り、発表の際のやりくりに関しても 88 パーセント(項目 4, 5 の合計)の生徒が工夫をしたという結果となり、やりくりの中身は異なっているが、やりくりをすることで仲間によりよく伝えようとしていたことがわかる。

発表をする際の工夫としては、最も工夫したものの次の 1~11 から3つ選ぶよう促したところ、以グラフのような結果が得られた。

1. 声を大きくする
2. 個々の発音をよくする
3. 話す速度を工夫する
4. アクセント・イントネーションに気を付ける
5. 台本(教科書本文等)にメモやしるしをつけて練習する。
6. 友達、家族、先生に分からないことを尋ねる
7. 友達や家族に、自分の発表する英語を聞いてもらう
8. 身振り・手ぶりをつける
9. 小道具(絵、写真、ものなど)を使う
10. 暗記する

## 11. その他

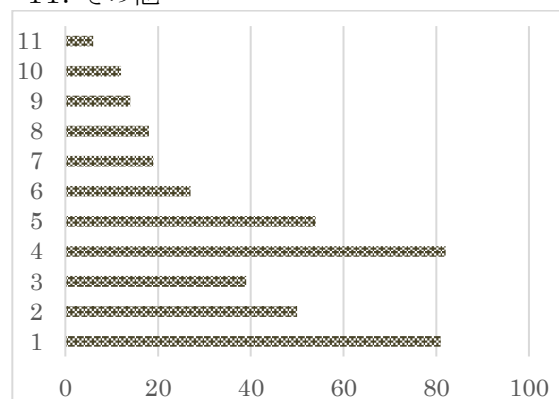


図 6-10 発表活動における工夫の中身(延べ人数)

生徒は音声に関する部分での工夫が多く、続いて練習する過程でのやりくりが多い。

次の図 6-11 は、音声に関する工夫の次に多かった工夫5(台本[教科書本文等]にメモや印をつけて練習をする)を行った生徒のワークシートである。

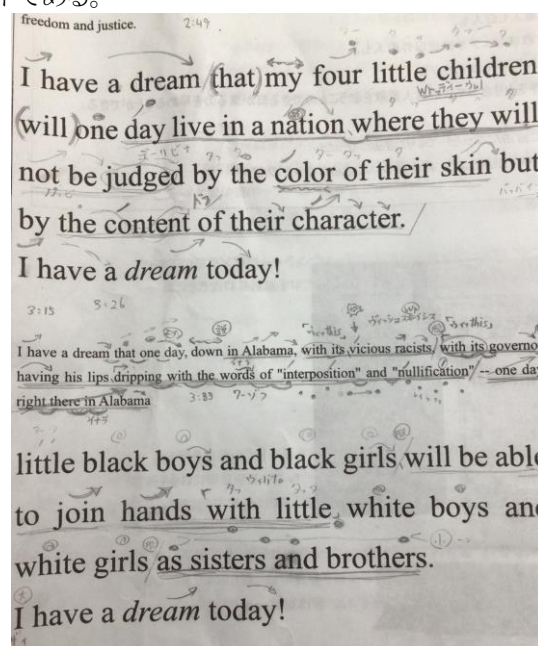


図 6-11 発表活動(Lesson 6)のワークシートの工夫

図 6-11 の工夫をした生徒に関しては、教科書本文のみならず、ワークシートに参考として載せたキング牧師の実際のスピーチも練習し、暗記した上で発表をした。そのため発表時はクラスでも歓声上がるほどであった。家庭でも繰り返し練習をして臨んだとのことだった。



図 6-12 発表活動(Lesson 6)の準備中

図 6-12 は、生徒がキング牧師の実際のスピーチを食い入るように見ている。キング牧師の熱量を感じることで、自分の発表をよりよくしようとする姿が見られた。

また、次の図 6-13 は班の仲間と話し合い、意見を交わすことでよりよい発表につなげようとしている。



図 6-13 班の仲間と話し合いながらの発表の準備

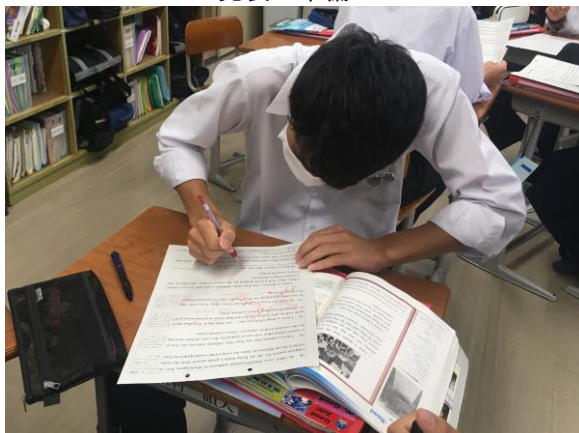


図 6-14 発表活動(Lesson 6)のワークシートに記入している生徒

図 6-14 の生徒は、前回の発表(Lesson 5 Brazil)において自身が納得できる発表ができなかったため、その挽回のためにも、取り組みの姿勢を大きく変えた。自分で伝え方をやりくりすることで、よりよく仲間に伝えようとしていることがわかる。

このように取り組んできた発表活動だが、生徒が積極的に取り組んできたかどうかは、発表活動への取り組みの姿勢について尋ねた以下の項目のアンケート結果でわかる。

1. 消極的だった。
2. どちらかと言えば消極的だった。
3. どちらともいえない。
4. どちらかと言えば積極的だった。
5. 積極的だった。

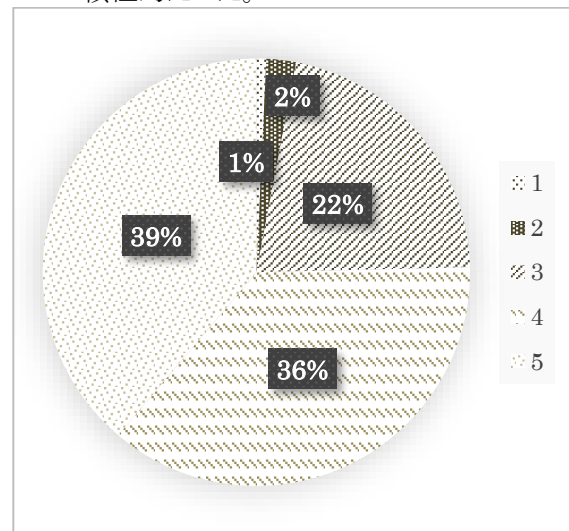


図 6-15 発表活動に取り組む姿勢

アンケートの結果、75パーセントの生徒が積極的(項目 4, 5)に発表活動に取り組んでいたことがわかる。また、図 6-15(発表活動への積極性)と図 6-9(発表活動で工夫をしたか)の項目については、アンケートの結果より相関があることがわかった(相関係数 0.44)。積極的に取り組む生徒ほど、発表活動でも工夫をし、よりよい発表をしようとしていることがわかる。

また、Lesson 5 と Lesson 6 の発表活動では、教科書本文を筆者やその時代背景等を考えながら音読及び暗唱発表をすることを目指したが、

発表活動に向かう事前の学習内容には差をつけていた。前述のとおり、Lesson 5 では教科書の内容を追う問題(理解、聞くこと)を、Lesson 6 では答えが一つではないものについて考えていく問題(理解、読むこと)を出していたのだが、どちらの学習方法がよりよい発表につながったかに関して、以下の項目によるアンケートを実施したところ、次のような結果になった(図 6-16)。

1. 教科書の内容を追っていく問題が有効であった。
2. 教科書の内容を大まかに捉えた上で、答えが一つではないものについて考えていく問題が有効だった。
3. 1, 2 のどちらとも有効だった。
4. 1, 2 のどちらも有効ではなかった  
(発表活動に向かうにあたり、あまり関係がなかった。)
5. その他

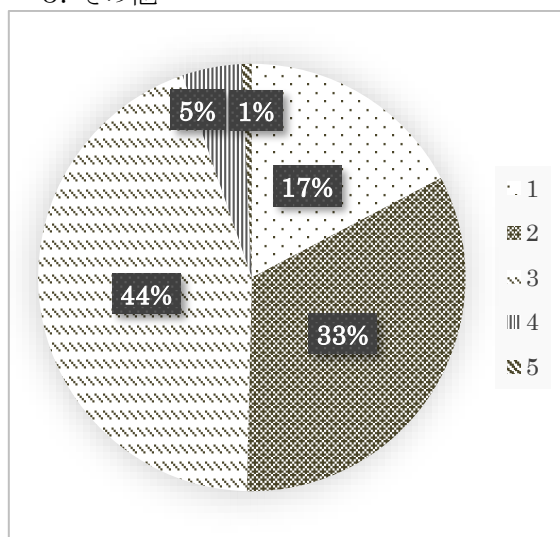


図 6-16 発表活動に向けて A(教科書の内容を追っていく問題)と B(教科書の内容を大まかに捉えた上で、答えが一つではないものについて考えていく問題)とどちらが有効であったか。

このアンケートの結果では、約半数の生徒がどちらの活動も有効だったとしている(項目 3, 44%)。ただ、1と2との比較では、約2倍の生徒が B の答えが一つではないものについて答える 2 の問題のほうがより良い発表活動につながったと答えた生徒が約2倍であったことは興味深い。

2 のような質問においては、教科書の中に答

えがないため、自分が他教科で学習したことや今までに見聞きしたことなどを総合的にまとめて答えなければならないため、生徒も過去の知識をやりくりして考える必要がでてくる。教師の実感としても、Lesson 5 より Lesson 6 の発表のほうが、生徒が思いを込めて発表していたように思う。

### 6.7 3年生の実践の考察

英語授業における「やりくり」を考えたとき、これまでは英語を書いたり話したりする量や内容の質について考えることが多かったが、来年度からの新学習指導要領を意識し、聞くことと話すこと(発表)の部分に焦点を当て実践を行った。

英語には学校でのみ触れる生徒がほとんどであり、入試以外で英語を必要とする切迫感がない。しかしながら、さまざまなアプローチの仕方を試みることで、生徒が英語を学習しようとする意欲、新学習指導要領の評価規準では、「主体的に学習に取り組む態度」が生徒の学習への取り組みの質に影響を及ぼすことがわかった。

これらの取り組みを終え、生徒が英語を話すことに自信をつけてきた今、Large Grammar をいつもの授業での内容とは違うものとせず、授業の最初の10分程度で行える帯活動として取り入れる方法を模索している。即興で話すことが求められているため、Large Grammar の Advanced 活動の変形として、次のような活動を週に1回程度行っている。その活動はペアで行い、与えられたトピックに関し、90 秒間でペアが話している間に、その内容に関する質問を即興で考え、その後の 90 秒で質問し、ペアが答えるというものである。

Large Grammar 活動の後半の Advanced 活動の変形では、即興で質問を考え、答えることを目標として、図 6-16 のワークシートを用いて行っている。

**Listen, Make Questions & Ask**

<b>Topic:</b>	
<b>NOTE</b> Your Partner's Name ( )	
Question 1:	Answer for Q. 1:
Question 2:	Answer for Q. 2:
Question 3:	Answer for Q. 3:
Date: _____ Class: _____ No: _____ Name: _____	

図 6-16 Large Grammar Advanced 活動の変形

生徒同士で話した後は、ペアが話した内容と質問に答えた内容を合わせて、ワークシートの裏に3分間、英語でまとめて書くものである。この活動を繰り返すことで、即興で話し、情報をまとめて書く力へと発展していくものと考えている。

今後、新学習指導要領にある5つの領域と評価規準等、まだまだ考えなければならないことがあるが、よりよく生徒の英語の力を身に着けさせるため、なにかできることがないかを考え、さまざまなやりくりの方法を模索していきたい。

### 【謝辞】

今年度も、本校英語科の授業づくりにあたり、鳥取大学の足立和美名誉教授に多大なご助言と示唆をいただいた。深くお礼と感謝を申し上げたい。

### 文献

伊藤 由紀子 (2015) ”英文手紙交換がもたらす中学生の異文化理解と英語学習に対する意識の向上”英検研究助成報告書

藤村宣之ほか編 (2018)『協同的探究学習で育む「わかる学力」』ミネルヴァ書房,40pp-41pp,

文部科学省国立教育政策研究所(2020.3)「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 外国語

中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語編

高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 外国語編